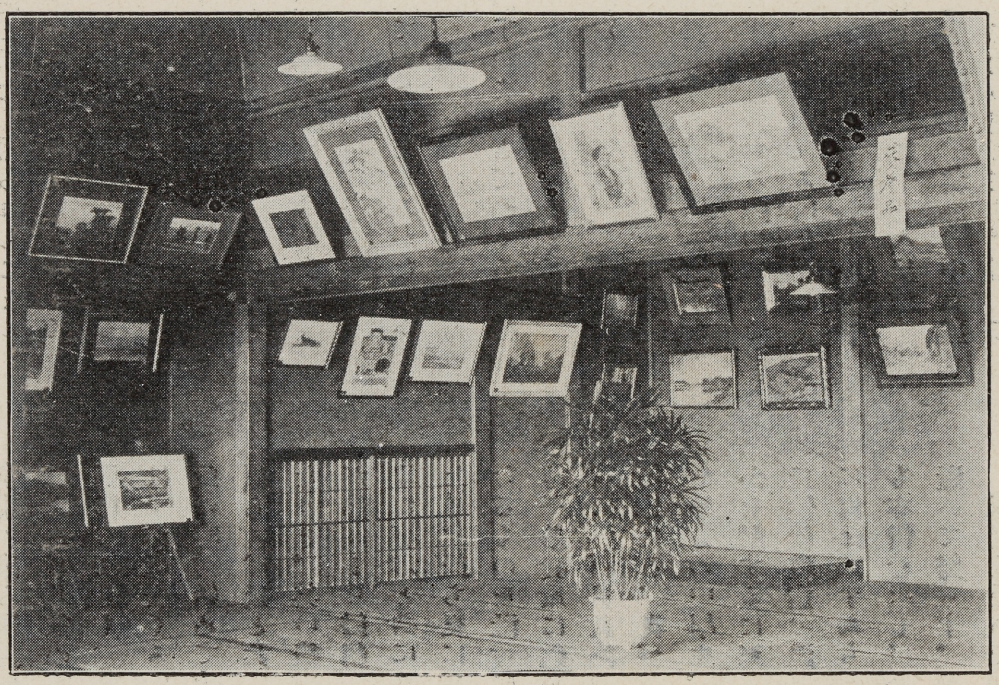
悲しき思ひ出で

春　子

うたかたの泡よりはかなき人の身とは、かねて知りにし事ながらきのふけふ我身の上のかゝらんとは、實に思ひまふけぬ事なりし、十とせにあまる年月しげき人の世の數にはもれぬ、さま〳〵のうれひ惱みも、永き未來に望をかけて生きにしものを、希望や何、望や何、消えてはかなき一場の夢なりしよ、此夏敦賀の講習より歸らせ給ひしより何となう勝れ給はず始めのほどは旅の勞れにもおはさむとおもひしに、やう〳〵日もふるになほはか〳〵しからぬに氣遣はしく、强て醫士の診察をすゝめぬされどさしたる事にもあらればさまでに心配はなしとの事にて少し胸やすまりぬ、其後も折ふし來診を乞ひしかど格別の事なしとの事なれば心のまゝにし給ひていつしか一月は過ぎぬ、明年はかねての望み叶ひて水彩展覽會を催すべければそれに出すべき作品なくては心細し、今四五日もたゝば快よかるべく何處へか旅行せむなどゝ日々旅の事など語りあひぬ、さるに八日の朝より少し容體あしう見えければ診察をうけしにつとめて安靜を要すとの事にて始めて病床の人となり給いぬ、されど氣分は常にも變らずいと元氣よく自らさほどにもなきに大病人あつかいするよとてさまでの惱みもなく九日も事なう暮しぬ此日正男少し恙(つゝが)ありて學殺休みしものから晝飯は父上と共にとて食事をとりぬ、これぞ後におもひあはすれば親子團欒の會食の最後なりしよな、翌十日も午前は常の如く氣分もいとさやかにおはし正男も快よくなりて學校へゆきぬ、お晝はよきさしみありたればおかゆすゝめしに、此折もわさびはしげきつよもの故あしからむとて見合せ給ひぬ、神ならぬ身の後三四日の壽命とはいかで知り給ふべき、そを又心附ざりしこそくれ〳〵も口惜しきかぎりなりし、食後少し立ちて手紙の代筆四五通なし繪の發送すべきものありてこれも兎せよ角せよと命ぜられ尙手紙あれどそは明日にせよとの事にて筆おきぬ此時何とも知れず胸せまりて涙はら〳〵とせしに、目ざとくも見合ひて、二夜さねむられば少しまどろめよとすゝめられぬ、よしなき事せしと心をとりなほし今宵は何を參らせむ特に好み給ふものあらばそれにても、一品作り參らせむといひしに、さらば**コロツケ**こそよけれど世話なればそれにも及ばずとの事故、いと易き事とて仕度せむとおもひ、尙栗の實みのらばきんとんしてよなど語り合ひ正男もはや歸りこん、歸らば裏のクコの實赤くみのりて美しければ野菊とをらせよなどいつに變らず、また旅より旅といふ(吉江氏の)小册子を手にとり給ひぬ、さらば早く夕餐の仕度と勝手に行き**ポテト**の皮一つむきはじめしに、咳仕給ふようなれば、急ぎまた病床にゆきてみとりせしに常とは異りしようにおもはれしかば、急ぎ醫士の許に電話かけさせ又折から來合せし門下生にお身も近くの醫士招ぎて給へと、たのみひたすら少しもはやく治まらむ事を願ひしかひもなく、次第〳〵に樣子只ならずなり給ひ僅にしつかりせよとの一言ありしのみ正男と二人聲をかぎりに呼べどさけべと答へさえなくあへなくなり給ひぬ、かくても

此まゝとは思ひもかけず水をふきかけ湯たんぽなど入れて見つ只〳〵醫士の來診をまつのみ、折あしく近くの醫士は皆往診中主醫は遠方なり只如何にせましと思ひ惑ふ内に、やう〳〵一人來られしも只一目最早望みなしとの宣告に胸もつぶる計りとは實にかゝる折の事にやあらむ、されど尙あきらめかねて主治醫をまちしにそはまたあだなりし、烈しき心臟痳痺を起し給ひし事なれば最早手の下すべきようなしと、の給ひぬ、無情は常とは知りながらも遂今迄も兎や角と語り給ひしに、其魂は何處の處にやかけり給ふわづか十分と經ぬ間に幽明遠き別れとはかなさも、つれなさも、實に此上の事やあるべき、才勝れしとて業あればとてよわきは女の常なるを、ましてや何の業もなく凡てを良人にまちし身の今よりは何を頼みに生くべきあまりの事に涙も出でず變りし樣の只〳〵うらめしくなりぬ、正男出生の折の日記の末にも此兒將來如何になりゆくべきと望をかけられしに未だ小學も終らぬ、永き將來をおろかなる身の此重荷をいかに負ひ行かるべき前途なほはるかなる行末をおもへば絶えられず、人々は此身に障らむ事をうれひ給ひて樣々になぐさめられぬ、されど〳〵身に障るとて何かせむ今は心行計り泣きあかさむこそせめてもの心遣りなれ、正男はさすが男子とて、「母さん泣いてはいや僕も泣きませぬお父樣は遠くへ旅行なさつてゐらつしやると思ひましやう」と歸り給ふ旅ならば幾とせの月日も、いかなる淋しさも待ちもすべし、耐えもすべしいつをかぎりの當どもなきに、胸もさけなむばかりなり、去年のけふ此ごろは十和田の秋をさぐり給ひしに、あすありとの古歌にもまさるあはれさ、忘れんとして忘れられず、徒らに過ぎし日の事のみ忍ばれて涙つきせず、かつてロンドンよりの玉章の端にも藝術家の妻となりし上は犧牲となりてよ、との言の葉さえ今は中〳〵思ひの種なれ、此夏歸られてより、講習も程〳〵に仕給へ正男もいつの年も〳〵〳〵暑中休みはお留守なれば何處へも行けず寫生のための旅なればせんなけれど、えんじしに來年は何處へも行くまじ、かゝる業も老年に及びては覺束なし、萬一に



も此爲我身を傷むるようの事ありとも、我つとめのためにたほるる事なれば少しも悔む事なし、と何とはなく語られしことのゆくりなくも言葉の如くなり給ひぬ、なほかゝまほしき事さはなれど駒せまりて筆とめぬ。

文展にて　　けい子

思ひ出は愁しき秋をここに又捧げられつる花に泣くかな

なき人を忍ぶが岡に秋訪へば散り殘りたる紅葉傷まし

なつかしき都の秋も來て見れば愁しき風の吹すさむかな

春　子

忘れえぬ日はいつしかにめくり來てまた新たなるかなしみのます

いたすらに涙ますなりいとし子が手向まつとてつくる花輪の

畏友大下氏

藤村知子多

予、遇、酒匂なる別邸より歸り、其の夜、意外なる悲報に接せり、舊友大下氏の訃、即ち是れなり。聊予か知れる所を記して以て、哀悼の意を表せんとす。

予、大下氏と、畫友として、相知りてより、玆に十七八星霜。明治二十六年頃なりけん、予は始めて畫に志し、當時、中丸塾と云ふに入塾せり。大下氏、先輩として此の塾に在り。而して予の入塾せし當時は、氏の指導を受けたること多々なりき。氏と相知り、久しからずして、氏の尊父逝去せらる、即ち氏は家業の傍ら繪畫を研究せられ居たり。後一二年にして當時眞砂町にありし家の家業を處理し、本郷追分町に新築せられ、玆に引移られしも、又久しからずして、家事上の都合により、同邸は予が引受くるに至り、氏は同番地なる宿屋に下宿せらる。此の時、始めて氏は全く畫書生として、專心研究に其の身を委ねらる、氏と共に予が、郊外寫生など試みたるも多くは此の時なりき。其の後現今の駒井町に新居を卜せられ、三十七年、予が佛國より歸朝して、氏を青梅の寓居に訪づれし時は、氏は仝地の有志と共に水彩畫の研究、並びに其の普及に盡瘁せられ居たり。後ち更に春鳥會を起して、みづゑを發行し、廣く水彩畫なるものを社會に紹介し、進むで又日本水彩畫會を設けて、大に子弟養成に勉め、已に其の門下に數多の秀才を出せり。氏は實に眞面目且熱心なる。水彩畫研究並びに其の普及の急先鋒をなしたる、我が洋畫界のオーソリチーとして記すべきもの、今や地方の中學生、小學生等に至るまで、普ねく水彩畫の何たるかを解するに至りしは、氏の努力大に與て力ある所たり。

氏性行謹肅、溫厚篤實、誠に畏敬すべきの人。氏今や壯年、將に尙ほ爲すあらんとするの時、俄然逝去せらる。實に悼ましくも亦惜むべし。今や秋色紅を添へて、氏の健筆を待つの時、君逝いて歸らず。嗚呼、我が畏友、汀鶯大下氏。

維時明治四十四年十月中旬